

16世紀日本の殉教

——海外の視点から——

Le martyr du Japon au XVI^e siècle :
dans les perspectives étrangères

相 田 淑 子

要 旨

「26聖人」として知られる26名の処刑は、日本の殉教事件で最初の大規模なものである。1597年2月5日の午前に長崎の西坂の丘で為政者の命令によりキリスト教宣教師と信徒の26名が磔刑にされた。この事件は西洋世界の関心に比べ、長く鎖国にあった日本ではその研究は20世紀を待たなければならなかった。かつてのフランスはキリスト教世界の一部に過ぎないが、それでも「日本の26名の殉教」に関する資料数は多数残されている。キリスト教国として列福や列聖に敏感に反応し、絵画、彫刻、書籍等も生み出された。「踏み絵」もなかったこの時代の日本で、なぜ子供たちまで殺されなければならなかったのか。

本論では殉教事件がなぜ起こったのか、という問題に正面から向き合い、そこから生み出された文学、芸術作品へも目をむけて、「殉教」の問題を考える。

キーワード

殉教, 16世紀, 列福, 列聖, 寛容

はじめに

中央大学人文科学研究所の「16世紀における寛容」研究チームの例会でとりあげている「寛容の歴史書¹⁾」の中身は「非寛容」の歴史の展開である。人間の営みにおいて「寛容」は「非寛容」の例示でしか語られないという事実が突きつけられたかのようなのである。為政者の「非寛容」を被った

人々の極端な反応が「殉教」である。16世紀西洋世界のキリスト教が日本にもたらされて半世紀もしないうちに、大規模な「殉教」が起こった。その事件を通して見えてくるものを以下に辿る。夢物語の寛容を掲げるつもりも、殉教を極端に美化するつもりもない。ただ理想の「寛容」をはるか遠くに見据えて、歴史資料を紐解く。その一つの例が16世紀日本の殉教である。

史実の記録文献について

1597年2月5日の午前に長崎の西坂の丘で、為政者の命令により、キリスト教宣教師と在野の信徒の合わせて26名が磔刑にされた事件は、現場となった日本よりもヨーロッパで広く知られている。同時代の報告は複数残されている。例えば、『日本史』で有名なポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・フロイス (Luis Fróis, 1532-1597) の報告書、イタリアの商人カルレッティ (Francesco Carletti, 1594-1606) の旅行記、日本在住のアビラ・ヒロン (Avila Girón, 1590年以前-1619) の言及、フランシスコ会のテイヨ (Francisco Teillo 15..?-16..?) の報告書等を挙げることができる²⁾。中でもフロイスは、イエズス会上層部に定期的に送る年次報告書とは別に、この殉教事件に特化した報告書 (以下「殉教記録」と略記) を作成している。一般に、日本からの報告書の類は安全のために船のルートを分けてローマに移送された。イエズス会のアジア拠点では校閲や修正が行われ、永久保存にふさわしい文書がローマ (教皇庁) に送られる。このシステムは16世紀後半には確立していたようで、「殉教記録」は長崎でフロイスによってポルトガル語とスペイン語の記録が作成され、前者はマカオ経由でローマに、後者はマニラ経由でローマに運ばれた³⁾。そしてひとたび「殉教記録」が西洋に入ると、数年の内にイタリア語、フランス語、ドイツ語、英語、ラテン語等の翻訳書が発刊された⁴⁾。

本稿は、今日では批判されることもあるフロイスの「殉教記録」ではあ

るが、その翻訳書と共に史実の記録として使用した。

1. なぜ事件は起こったのか

なぜ処刑されたのかを明確に教えてくれる文書は少ないが、殉教者がどのように拉致されて、どのように殺されたのかを報告する文書は複数ある⁵⁾。まずそれを簡単にまとめてみる。

1596年の年末、太公秀吉が宣教師の捕縛を開始した。京都と大阪のフランシスコ会員、日本人のイエズス会員が捕らえられた。

12月31日に太公秀吉は24名に長崎での磔刑を言い渡す。

年が明け、京都の牢獄に移されて、3日に上京戻橋近くで左耳を削がれ、荷車に載せられて数日にわたって京都、大阪で引き回しが行われた（映画で良く知られるシーンである）。

その後、彼らは、京都から長崎までの旅程をたどる。歩き始めた時点では24名（フランシスコ会員6名、日本人イエズス会3名、在野の信徒15名）だが、彼らを援助するために遣わされたフランコ（François Phahéleste, -1597.2.5）とイエズス会側から遣わされたペトロすけじろう（Pierre Sukegiro, -1597.2.5）が加わり26名となる。

播磨、備前、安芸と山陽道をたどり、複数の場所で複数の城主や人々から、彼らは温情を受け、手紙も残す。

下関から船で小倉、そして陸路で志賀島まで行くが、1月31日、志賀島から名護屋にわたるつもりが、悪天候で博多に入港する。

2月4日に武雄を経て彼杵に到着し、大村湾を渡り時津に着く。

2月5日、原爆投下で有名な浦上まで進み、殉教地の海に面した西坂の丘で、殉教者は一列に並んだ日本風の十字架に磔にされ、槍で貫かれた。長崎の信者4,000名余りがこの光景を目撃したとフロイスの

「殉教記録」では言われている⁶⁾。

「どのように」という観点では複数の資料によって補うことができる。しかし、なぜ長崎の西坂の丘で、10代から60代までのキリスト教信者26名が処刑されなければならなかったのか。「なぜ」という問題はこの殉教事件の根幹に関わる。

「なぜ処刑したのか」、これを完全に納得させてくれる資料は少ない。教科書的な記述では、「サン＝フェリペ号事件」や「バテレン追放令（伴天連追放令）」を理由にすることが多い。

だがサン＝フェリペ号の土佐沖の難破によって上陸した船員の発言や、難破船をめぐる交渉の記録から、26名の死刑は直接的には導き出せない。26名の中で問題のサン＝フェリペ号で来日した者は、1名（フェリペ・デ・ヘスス、Philippe de Jesus, 1572頃-1597.2.5）である。この件で秀吉との交渉に成功しなかった神父ペドロ＝バプティスタ（Pedro Bautista Blázquez, 1542.6.29-1597.2.5）は、確かに秀吉の不評を買った。関西から長崎までの旅で26名のリーダー格と捉えられているが、逮捕時には26名のリーダーではない。ペドロ＝バプティスタの属するフランシスコ会とイエズス会が長崎で対立していたことを考えれば尚更である。この26名の囚人には、イエズス会の修道僧レベルの者が含まれていたからである。

また「バテレン追放令」については、「バテレン」は狭義ではキリシタン宣教師でも司祭レベルの者を指すキリスト教の用語であるだけに、バテレンには該当しない者が、26名の大半である。1587年の「バテレン追放令」と1597年26名の殉教は、10年以上の隔たりがあり、条文の「20日以内に帰国」という命令にそぐわない。20日間の猶予を10年に延ばすことは考え難い。さらに近年では、海外を含めて複数の研究者が、殉教事件との関連を否定的な立場で捉え、きめ細かい分析をしている。フランス人研究者がこ

の追放令のフランス語訳を掲げているので、あえてそれを抄訳で提示する⁷⁾。

1. 日本は自らの神々によって護られている国なのだから、キリスト教の国から邪法をさずけることは、まったくもってよろしくない。
2. (大名が) その土地の人間を教えに近づけて信者にし、寺社を壊させるなど聞いたことがない。諸国の大名が従っているのは一時的なことなのだ。天下からの法律に従って、さまざまな点でその意味を実現すべきなのに、いいかげんな態度でそれをしないのはよろしくない。
3. キリスト教の国の人がその教えにより、信者をどんどん増やそうと考えるのは、前に書いたとおりの日本中の仏法を破ることになるということは忘れてはならない。日本にキリスト教徒を置いておくことはできないので、今日から20日間で支度してキリスト教の国に帰りなさい。キリスト教徒であるのに自分は違うと言い張るのはよろしくない。
4. 貿易船は商売をしにきているのだから、これとは別のことなので、今後も商売を続けること。
5. 今後は、国法を妨げるのでなければ、商人でなくとも、いつでもキリスト教徒の国から往復するのは問題ないので、それは許可する。

天正15年(1587年)6月19日

この「追放令」が法令の体裁をなさず、貿易奨励や貿易保護が主眼であることが再確認される。外国人研究者による「バテレン追放令」の再読、外国人宣教師向けのポルトガル語版「バテレン追放令」との対照等々の研究を通して、「バテレン追放令」と26名の殉教に特段の関係を主張することは難しい、という結論が出される⁸⁾。妥当な結論だと考えられる。

フロイスの「殉教記録」の中では、「なぜ京都でなく長崎で処刑されたのか」という問いがある⁹⁾。フロイスはこれに対して二つの回答を記す。一つは神意志、という解釈。つまり出来る限り西洋に近いキリシタンの土地で遺骸が葬られ、長崎のキリシタンにさらに熱い信仰心を植えつけることができる、という神の取り計らいとの解釈である。フロイスの宣教師としての心的態度とも取れる。もう一つの回答は、王（秀吉）の目的、つまりキリスト教の教えがこの日本で望まれないことを宣言し、恐怖によって日本人がこの宗教を受け付けないように導くという為政者側の作戦である。畏怖によって信者を抑え、フロイス自身も含めた宣教師に日本での宣教活動の危険を知らせ、今後は厳しく処罰する可能性があることを世界に向けて知らせたかったのだ、という解釈である。これは報告者の分析と言えるだろう。今後の布教活動のために来る者たちを処刑という罰で牽制するだけでなく、この処刑の様を見て身をひそめた外国人宣教師はひとりではないことが知られている。来日予定の宣教師のみならず、すでに日本に居を定めている宣教師にも恐怖を与えことは確かである。さらに宣教師は自分たちが布教することが、子供も含めた純朴な日本人信徒の死にもつながるという意識は、たとえそれが「殉教」であったとしても、布教には戸惑いが無かったとは思われない。

為政者側の残酷な処刑から逃れる方法は、キリスト教の否定、棄教だけで良かった。26名の日本での道中では信仰の否定さえ、釈放の厳密な条件ではなさそうに感じられるやり取りが見られるが、それでも「なぜ」死を受け入れたのか。

19世紀の資料で、26名の殉教者で年若いアントニオ（Antonio de Nangazachi, 1584-1597. 2. 5）が、処刑の予定された長崎に入り、沿道に両親が立っている姿を見つける件りがある（下線、筆者）¹⁰⁾。

アントニオは父親と母親が住んでいたその市を訪れ、処刑場に近づくと、悲しみに打ちひしがれ、涙を流しながら迎える両親の姿が見えた。彼らはキリスト教徒ではなかった。何としても愛する息子を救いたいと思い、まだこれからの人生があるのだから、自分を死に追いやることのないよう、彼に懇願した。信仰を告白するのはもっと大きくなってからにしろという具合に。両親の懇願とうめき声と涙の光景が、周囲の人々の胸を打つ。しかし、この立派な子どもは、年齢的な弱さに影響されることなく、内面的には雄々しい強さが備わっていたため、悪魔の猛威が両親を通して彼に仕掛けている待ち伏せの危険性をすべて理解していた。彼は両親に答える。「私は、神が私に勇気を与えてくださるという揺らぐことのない確信を持っています。この闘いから勝利を得るために。それゆえ、あなた方も助言と懇願を止め、私たちの神聖な信仰を異教徒の侮蔑と嘲笑にさらすようなことはなさらないでください。私はキリスト教の勝利のために血を流すことを決意しています」¹¹⁾。

両親の我が子への懇願は、この資料では、親の子を思う悲痛な気持ちではなく、それを利用した「悪魔の猛威 (la rage du démon)」で、「両親を通して彼に仕掛けた罠」という解釈である。さらにこの光景を見た処刑を司る役人が、感動を抑えきれずに小さなアントニオに近づき言葉をかける場面が続く。この声かけも悪魔の「新しい攻撃」と評される(下線、筆者)。

「子よ、これ以上両親の求めに抵抗せず、憐れんであげなさい。確かに両親は貧しい。私はあなたを我が家に迎え入れ、我が子として扱おう。私は太閤から大きな富と最も名誉ある地位を得ることを約束するよ。」この新しい攻撃を拒否して彼は答える「あなた方が私に与える名

誉や富は地上のもので、すぐに消えてしまう。しかし、イエス・キリストは私に天上のもの、永遠のものを約束してくださった」と¹²⁾。

京都から長崎への移動途中に幾度か囁かれる城主や奉行の「釈放」の言葉は、寛大な提案だったのかもしれないが、キリスト教世界の理解では、「悪魔の誘惑」である。それを受け入れないことが殉教者になるための条件である。天国での殉教者たちの華々しい凱旋の姿を想像することができなければ、殉教など到底できるはずはない、と想像できる。なぜ、殉教したのか、これは26名の心の内にはしっかり根を張った西洋キリスト教の信仰ゆえということになるのだろう。当座の結論である。

2. 「殉教」と「列聖・列福」

ヨーロッパでは「殉教者の書」の印刷が、プロテスタントにおいて1554年のジュネーブ公会議で承認を得ている。その際、「saint (聖人)」と「martyr (殉教者)」という言葉をもとの名称に修正するように勧告が行われた¹³⁾。カトリックの場合はそのはるか前から「殉教」は準備され、日本でも言葉として「martyr」が登場するのが16世紀である。この殉教事件の2年前、1595年に日本イエズス会が編纂した辞書は、ラテン語とポルトガル語の見出しに日本語をローマ字ように記した辞書（羅葡日辞書）である¹⁴⁾。Martyr については次の記載がある（カッコ内は便宜上、加筆した読みで、必ずしも漢字と合わない可能性がある）。

Martyr , iris.

Deusuno go foconi taixite caxacuuo v que, inochiuno sasagueraretaru
jennin

(デウスのご奉公に対して 画策を受け、命の捧げられたる 善人)

Martyrium. Martyrio

Deusuno gofoconi taixite caxacuuo vque, inochiuo sasaguru cōtoou yū

(デウスのご奉公に対して画策を受け、命を捧ぐることをいう)

「殉教」の意味について、「神へ仕える事が原因で、外部からの画策、策略によって命を捧げる」つまり「死ぬこと」と明確な定義が記されている。語源としては「証人」や「証し」を意味する *martyrio* に、発音に合わせて「丸血留 (マルテル)」と漢字を当てはめた妙に言い得た表記もあるが、概念として日本人に理解されるまで原語のまま使用されたのだと思う。現行の「殉教」とは若干のニュアンスにずれがあるのが気になるが、いずれにしても、この言葉の意味を日本人信徒に教示し、*martyrio* に動員するまで浸透させるのに、キリスト教伝来から半世紀もかかっていない。「殉教」の手引書の類は、日本でも流布したことが知られているが、26名の殉教者が江戸時代以前のものであったことを考えると、日本の精神的な風土に合う「思想」であったのだろうか。特に迫害が加速された江戸時代に、26名の殉教者を福者に顕彰したウルバヌス8世に対して、美術史家エミール・マールの言葉は辛辣である (下線は筆者)。

ウルバン8世が1597年の殉教者たちを植民地化していた頃、日本のキリスト教徒は恐ろしい迫害によって瀕死の状態に陥っていた。1624年にはすでに3万人の信者が死んだと言われる。その後数十年間、虐殺は続き、殉教者の数はローマの迫害の数を上回ったに等しい¹⁵⁾。

顕彰が「植民地化 (colonisait)」と言うのは思い切った表現だが、マールはかなり早い時代にキリスト教の顕彰制度を疑問視していた。

26名の殉教者は、海外では26 Martyrs du Japon (日本の26名の殉教者) とい

うように、「日本」を付けて呼ばれることが慣例である。26名には訪日した者（スペイン、南米）が6名、日本生まれが20名なので、日本人ということではなく、当然、日本で起こった殉教という意味である。26名の殉教者は、聖人の前段階の「福者」に17世紀に列せられた。殉教から30年も経たない早い時期である。数年前（2017年）、26名とほぼ同時代の高山右近（1552-1615）が列福したのと比較するとかなり早いことが分かる。実際のところ26名の聖人化への運動は、殉教後、間も無く起こった。1604年に関西のキリスト教信者の代表がローマ教皇に列聖の祈願をした書類も現存する¹⁶⁾。

死後に列福や列聖を求める現実的な行為は、当然のことながら、後世の人々に託されるが、殉教の記憶が消滅する前に顕彰しなければならない。先述のフロイスの「殉教記録」の翻訳が海外で次々に出版されたのは、日本の26名が列福される以前である。事件後10年以内に出版された翻訳には、イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語、ラテン語等々の存在が確認される¹⁷⁾。さらに同じ国語においても複数の翻訳が存在する¹⁸⁾。列福、列聖されるためには、記憶に留められること、忘却されないことが不可欠である。この書籍の出版も、26名の列福を実現するための推進力となり、事件を人々の記憶に留めることに十分に貢献したと考えられる。

殉教事件の3年後、1600年にフランスのルーアンで早々と出版され、訳者の序文も付いた興味深い翻訳がある¹⁹⁾。訳者のファレーズ子爵（J. de Malfillastre Vicomte de Falaise）はローマの友人から入手したイタリア語版をフランス語に翻訳したと語る。極東の日本から発信された「殉教記録」が時間をかけてローマの教皇庁に着いた時点で、すでに複数のイタリア語版翻訳が出来ていた可能性はあるが、それらがローマから再発送されて、ヨーロッパに流布する。流通経路の詳細は不明だが、列福以前に、日本の殉教の事件はある程度、広範に知られていた。「殉教記録」の翻訳はその一端を確実に担っていたのだろう。

フロイスの「殉教記録」のフランス語版は、手に取りやすい小説のような体裁で、当時のフランス人読者にその内容はどのように受け止められたのであろうか。「殉教記録」は1597年7月に死去したフロイスにとって最晩年の書術であり、単なる報告ではなく、秀逸なノンフィクション文学という要素もある。読者を引き込む力があるのだ。「殉教」という強烈な出来事の力というよりは、フロイスが描写したり語ったりする作家の力量である。このような判断は現代読者の感想に過ぎないが、当時の読者が共通する読書気分には、また違う解釈もあって当然である。前述のフェレーズ子爵は、遠く離れた日本の殉教者たちについて次のように書いて、読者の理解を誘った。

私たちと同じカトリックの信仰を告白しているのを知れば、彼らの苦しみに関心し、彼らの喜びを共に分かち合って、初期教会の殉教者たちの歴史が再現されるに相応しいことを、さらにもっと言えば、この書物でそれが更新されていることが、きつとお分かりになるでしょう²⁰⁾。

「初期教会の殉教者の歴史」とは一般にはローマ帝政下の初期キリスト教徒の殉教のことである。ローマの為政者は殉教者を円形競技場の中で猛獣の餌食にさせ、見せ物として楽しむ観衆の役割を市民に担わせた。残虐極まりない光景ではあるが、見せ物的な要素は日本の26名の殉教にもある。市内を引き回したり、日本列島の西側を横断するように移動させたり、処刑の光景にもある。そして「殉教記録」には古代ローマを「更新」する殉教であることが序文では示唆される。初期キリスト教徒のローマ帝国下の処刑の例は、彼らフランス人にとってはもっとも身近で読書の助けになったのかもしれない。地理的に遠くないリヨンの円形競技場と長崎の処刑場

がつながったのか。キリスト教の世界では、ローマの例で、為政者の無慈悲な処刑をキリスト教徒が怖がらずに受け入れた、勇気ある抵抗の最良の例とする。これこそがキリスト教徒の殉教であって、勝利の証しである。殉教する本人に苦悩、苦痛はないという前提があり、苦しさを他者に見せてもいけない。黙って従順に耐えることよりも、耐えるためのエネルギーが、この時代の西洋人に評価されたのである。彼らの考える殉教は、為政者の非道な行為に対抗するため、死など恐れない途方もなく強い反抗の証しである。集団でそれを行うことがさらに評価される。為政者に負けないキリスト教徒の勝利の証しこそが、殉教なのである。だから「殉教(教えに殉ずる)」ではなく「martyr(証明する)」である(とは言っても現行の言葉(殉教)を本稿でも使い続けるしかないが)。

ローマの教皇側からみれば、殉教が非道な為政者への対抗策であり、これを「勝利」と捉えることで「聖人」として神格化するのは理屈に合う。アスリートに「良く頑張った」と称賛を送り、秀でた者には賞を贈る。列福や列聖もこれと同義となる。殉教者は「アスリート(選手、闘技者)」であり、実際にこの言葉が26名の殉教者に対して使われている文献もある。「そしてついに、私たちのアスリートの勝利を照らす日がやってきた。牢屋から出して、処刑場に導くため8台の荷車が用意されていた」^[21]。

今日、列福、列聖の意味を問い直したり、顕彰することの意義やさらには異議を唱える論考も現れた。ただこうした研究が、日本の26名の殉教者個人を吟味して異議を唱えるものではなく、列聖という制度の問題点に言及する研究である。顕彰の功罪を問い直し、制度そのものを問う合理的で将来性のあるアプローチである^[22]。こうした研究が進んでいることを意識しつつ、日本の26殉教者の列福と列聖を以下で取り上げる。

3. 日本の26名の殉教者の列福

列福とは聖人になるまえの段階で、「福者」になることである。1627年に教皇ウルバヌス8世（1568-1644、在位1623-44）は、日本の26名の殉教者の内23名だけを「福者」と宣言した。日本人信者17名は全てフランシスコ会の信者とされ、フランシスコ会の外国人神父と共に列福されたからである。会派の違うイエズス会3名、パウロ三木（1563-1597.2.5）、ディエゴ喜斎（1533-1597.2.5）、五島のヨハネ（1578-1597.2.5）は、1年ほど遅れて福者となった。23名の福者が早く登場したために、「日本の26名の殉教者」の絵画は、23名だけしか登場していないものが多い。

有名なロレーヌの画家、ジャック・カロ（Jacques Callos, 1592-1635）の作品には、版画の一種、エッチングの「日本の26名の殉教（図版1参照）」が、ナンシーの美術館だけでなく、上野の西洋美術館にも収蔵されている。

画面下半分の描写はどうみても日本ではない。十字架の並べ方も違う。どんなにカロが才能ある画家でも、映像資料などない16世紀日本の殉教の様を写實的に描き出すことは無理である。その一方で「殉教記録」を確認すれば、特徴的な十字架の形や、26名の十字架が一行に並べられたことは当時でも確認することができたはずである。見事な遠近法、整った構図のカロの秀作に写実性を求めても仕方がないのかもしれない。だが版画に23名しか彫らなかったことは下部の書き込みに意識されている。小さい文字で「タイカサム皇帝（原文ママ）下の日本、モンガサキ市（原文ママ）で、聖フランシスコ会修道院の最初に十字架にかけられた23名の殉教者の肖像」というフランス語の書き込みがある。日本の太閤様が長崎で磔刑に処した23名の殉教者を指摘した書き込みだが、タイトルとも説明ともつかない記述である。カロは単にフランシスコ会関係者から注文で版画を彫り、その会派の23名の福者しか表現しなかったのだろう。



図版1 [Les martyrs du Japon]: [estampe]
 ([1er état]) / Callot fec.
 (フランス国立図書館蔵)

カロよりも年長のタンツィオ・ダ・ヴァラッロ (Tanzio da Varallo, 1575-1633) は、教会からの注文の可能性は少ない。というのはミラノのブレア絵画館の作品「長崎でのフランシスコ会士の殉教²³⁾」は、十字架の立て方がカロの版画と同じではあるが、十字架は15本で、設置途中のものを入れても23本にもならない。十字架を設置する人間の力動感が伝わる見事な油彩である。創作年代は1627年、まさに列福の年と一致する。

さらに23名の絵画や版画は、フランシスコ会の偉人を称揚する目的でフランシスコ会系の教会に飾られることが多い。フランシスコ会に認定された17名の日本人殉教者が会派の違いをどれほど意識していたのかは疑問であるが、「フランシスコ会23名、イエズス会3名」という分類は、殉教事件

直後のフランシスコ会の報告書にも多々見られる記述である。他の報告書には、「外国人キリスト教徒6名、日本人キリスト教徒20名」という記載もある。極端な場合は「フランシスコ会6名（外国人キリスト教徒である）」の殉教しか記さない報告書もある。もちろん現代の日本にも「パウロ三木と同志殉教者と呼ばれた二十六殉教者」と言う記載を見ることができるので、それぞれの会派が益になるような表記を採用している。取るに足らないことなのかもしれないが興味もひく²⁴⁾。

列福の後、1628年のドイツでも「日本の26名の殉教者」を題材とした『長崎の二十六磔像（図版2参照）』が作成された。こちらは画面に収まりの良い十字架の数しかない。23本でも27本でもない。

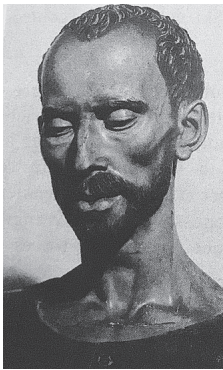
1年余り後、イエズス会3名も列福した。イエズス会には列聖者数が少ないこともあるために、この殉教者3名に関わる教会は少なくない。聖遺物を有する日本やアジアの教会を別にしても、フランスの教会でもヨーロッパ風の人物像でありながら日本の殉教者の名を見て驚くこともある（図



図版2 『長崎の二十六磔像』（1597年）ヴォルフガング・キリアン（銅版画家）作 アウクスブルク、1628年（Digitale Bibliothek - Münchener Digitalisierungszentrum 蔵）

版3)。イエズス会の日本人3名は、貴重な聖人ということになる。どちらの会派もそれぞれに関係する殉教者のみをことさらに称賛し「日本の26殉教者」と捉えようとする傾向があるようである。

その後、著名画家の図版は数多くの書籍に転載され、多くの人々の目に留まった。そうした影響もあるのかもしれないが、18世紀以降も23名の殉教者だけの「日本の26名の殉教者」が存在する。例えば下部に殉教者の名前が示されているので「日本の26名の殉教（図版4）」が題材とされていることが判明するのだが、23本の十字架しかない。1744年の作品である。



図版3 ジュアン・ド・ムサ
『パウロ・三木』
木彫り、1627年
(カンブレ教会蔵)



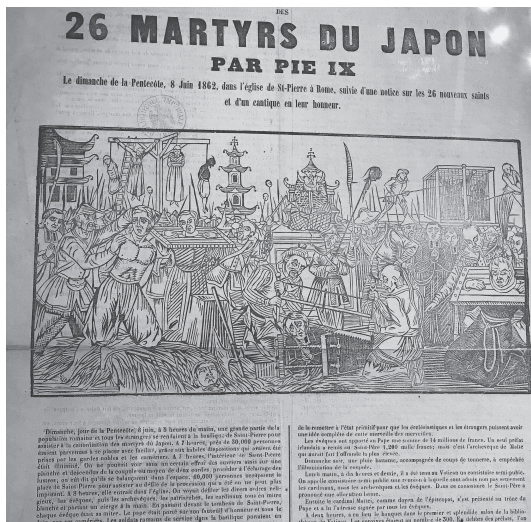
図版4 撮影、筆者、Engravins in Juan Francisco de San Antonio, *Chronicas de la Apostolica de San Gregorio*, Manila, 1744 (Charles Ralph Boxer, *The Christian Century*, 1951, 頁なし, フランス国立図書館蔵)

日本の26名の殉教者を福者にしたウルバヌス8世は、この数年後に列福と列聖に関する法令を編纂した（『諸聖人の列聖と列福に関する法令集（Decreta servanda in canonizatione et beatificatione Sanctorum）』1642年）。法令として制度が整えられる前に、日本の26名の殉教者は列福されたことになる。いずれにしても17世紀前半の列福の榮譽を、当事者の日本には国をあげて祝福するような機会はなかった。

4. 「日本の26名の殉教者」の列聖：1862年

列福、列聖は、血生臭い悲劇を華やかな祝祭の場とかえる力もあるようだ。日本の26名の殉教者がローマで列聖された。それを報道する紙面は、大々的に「日本の26名の殉教者、ピウス9世による列聖」を報じた。一面を飾る大きな版面も印象的である（図版5）。

図版にある記事はこう始まる。



図版5 筆者撮影（フランス国立図書館蔵²⁵⁾）

6月8日の聖霊降臨の日曜日、午前5時、大部分のローマ市民とすべての外国人が、日本の殉教者の列聖式に出席するためにサン・ピエトロ大聖堂に向かった。午前7時、3万人近い人々が、警備員やカメラマンたちの上手な配慮のおかげで、悠々と自分の場所に入ることができた。同じく午前7時、サン・ピエトロ大聖堂の内部がライトアップされた。シャンデリアを照らす職人たちは、2本のロープでドームから降ろされ、まるで空中を揺れ動くかのようにだった。6万人の人々がサンピエトロ広場を埋め尽くし、最も印象的な行列に立ち会う。午前8時、行列は教会に入った。さまざまな修道会士、司教、大司教、総主教そして枢機卿はみな白いミトラ帽をかぶり、手には蠟燭を持っていた。聖ペテロの墓を通り過ぎる時、各司教はミトラ帽を脱いだ。教皇は、カメラマンによって、名誉の椅子に座らされ、天蓋の下に運ばれる²⁶⁾。

この記事は、開式の数時間前からの実況中継のようである。この後も正装した衛兵の中で、スイス衛兵がラファエルのデザインの衣装を着用していることに注目したり、満杯の外交官のギャラリーや祭壇に置かれたさまざまな品に目を向ける。重さ30キロもある豪華な装飾が施された燭台、優雅な籠。銀の器も2つある。1つは白ワインで、もう1つは赤ワインが入っているそうである。

列聖式そのものは10時30分に終わり、その後、教皇は装束を変えて教皇庁のミサを行う。福音はラテン語で、次にギリシャ語で歌われ、合間にピウス9世が説教をする。ピウス9世が説教をすると、その極めて強いアクセントのある声が教会に響き渡ったと記事にはある。式典は午後1時に終了した。

タブロイド版の紙面は、裏に日本の26名の殉教者を聖人名として掲載し

ている。順番は6名の外国人のフランシスコ会関係者、日本人イエズス会関係者3名そして17名の日本人信徒の順である。17世紀の列福時のような会派に分けられた列福ではなく、26名全員が一度に聖人になった。26名の殉教者の記載の順は、最初がリーダー格の聖ペドロ＝バプティスタ、最後25番目が途中から参加した聖フランコと聖ペトロすけじろうと一緒に記載されている。

ひとたび聖人になると、「聖 Saint」の称号が付き、神格化された名前は眩しく感じられる。それだけに列聖はカトリック教会にとって大事な制度であり、上記の式典はその制度の一つの締めくくりである。宗教関係者だけではなく、外交官、市民、報道陣等々が加わり、3万人を超える人々が一同に集う祝典。ローマで行われた儀式をフランスの新聞が報じたように、キリスト教国の各地で祝われたことだろう。ヨーロッパでは「日本の26聖人」がさらに知られることになった。

歴史に刻まれた1862年6月8日の列聖の後も、前述の列福時と同様に芸術作品が生み出された。日仏の通商条約が締結されたこともあって、長崎ではフランス寺と呼ばれることになる二十六聖殉教者天主堂（通称、大浦天主堂）が作られ、堂内のために「日本の26名の殉教者」の絵画が作成される。建築や絵画だけでなく、エメ・ヴィリヨンの『日本聖人鮮血遺書』（日本カトリック刊行会）やそれ以降の映画化も列聖と無関係ではないのだろう。この時期の日本に関わる仕様については、すでに多くの言及があるので、ここでは列聖後に子供への視点で記述された書籍に目を向ける²⁷⁾。

日本の26名の殉教者の中で、未成年の3名の殉教者に特化した本である。『日本の三児童殉教者、キリスト教児童のモデルそして守り神として』の題名で、ブルターニュ地方の学校のチャペルで1863年2月5日の日本の26名の殉教者の列聖を祝うシーンから始まる。3ヶ月間、重病でやつれていく児童のために、彼の両親と彼の友人たちは、日本の新しい聖人たちに必死

で祈った。すると児童は健康を取り戻す。学校での祝典は、この日本の殉教者への感謝と献身の意味もあった。学校のチャペルには、「画家が再現した血生臭い26名の殉教の絵画」が主祭壇の上に飾られる²⁸⁾。3名の子供の殉教者は前景に描き出され、頭上では小さな天使が飛んで、勝利者たちの血の代償、永遠の王冠をもたらすために飛んでいる。こうした描写は、おそらく当時の多くの学校が列聖のために準備し、学校内の礼拝堂で式典をあげるのが普通だったことを示唆しているのかもしれない。そして奇跡（病児の快復）が重なった。

3名の祝福された名前を書き写しましょう。日本の教会の3つの花です。キリスト教の学校で子供たちの模範で、庇護者に相応しいこの若い英雄たち、この若い英雄たちについて歴史的な資料を丹念に集めましょう²⁹⁾。

児童に、書写や資料収集を指示する先生のような話し方で日本の殉教者を手放して讀める。ルイ（ルドビコ）、アントワーン（アントニオ）そしてトマ（トマス小崎）の3名の殉教の物語が順に語られている。

このように子供の殉教者だけを対象にした書籍は、17世紀の列福の時には発見できなかった。19世紀になると、子供の殉教者への関心が高まったのだろうか。今までは26名を会派で分けたり、国籍で分けたり、位階で分けることがあったが、今度は大人23名、子供3名、という分類も可能になったようである。

最 後 に

残虐な行為は現在も起こり、これからも起こりうる。殉教者が量産されない保証はない。キリスト教徒の側は、為政者の理不尽な行為を耐え命が

けで信仰を守ることを最高の美德とした。殉教者として命を落とすことこそキリスト者にとっての勝利であると考えた。殉教者は歴史に刻まれ、人々の記憶に留まり続ける。ルネサンスの詩人や芸術家たちは、「死」という存在に打ち勝つ「名誉」を寓意の形で表すことが頻繁にある。寓意は擬人化されて一種の偶像とされることもある。キリスト教は聖人を「聖像」にする。死に勝利して永遠を勝ち取る「栄誉」を殉教者に認め、さらに聖人として名前を歴史に残す。現実的で分かりやすい周知徹底である。

列聖や列福によって生み出された作品には、その作品自体が賞賛の対象になる場合も多々ある。絵画は殉教者の頭上に美しいパラダイスを描く。絵画はまさに美化した殉教を描くことができる。天使や花々の芳しさに包まれた天の様子が描きだされる。絵画の美しい描写がさらに、「殉教」への憧憬を誘うかのようなようである。子供にも優しく「殉教」を説くことができる。そのような例を上記でも取り上げてきた。

だが、殉教をめぐるアンビバレントな感情は、列福・列聖や芸術作品に対しても生まれることがある。何より殉教は血生臭い酷い光景であることは確かである。そして残虐な行為を許した為政者にまず非難が向けられるべきである。「寛容」は残虐な事態を引き起こさないためのブレーキである。今日にあっては、宗教の「多様性」を認めることである。ただ多様な宗教を認め、片や国を維持するだけの力を保持することは為政者にとってどれほど困難なことなのか。寛容の歴史はそれを無数の例で説明してくれる。殉教は決して過去のことでないのである。

註

- 1) Joseph Lecler, *Histoire de la tolérance au siècle de la Réforme*, A.Michel, 1994, 853 p.
- 2) 以下に本文の順に記載：

- Frois L. *De Rebus japonicis historica relatio, eaque triplex : I. de Gloriosa morte 26 crucifixorum*, Moguntiae, in latinam linguam translata, 1599. pp. 1-81.
 - アビラ・ヒロン『日本王国記』, 岩波書店, 1965年, 佐久間正他 2 名訳。
 - « Francesco Carletti (1594-1606), marchand de Florence séjourne au Japon de juin 1597 à mars 1598 » in *Voyage autour du monde de Francesco Carletti (1594-1606)*, Chandeigne, Paris, 1999.
 - Teillo, Francisco, *Relation envoyée par Don Francisque Teillo, Gouverneur, Capitaine general des Isles Philippines, touchant le martyr de six religieux espagnols, de l'ordre de Saint François de l'Observance* / premièrement impr. à Seville en langue espagnolle (en 1597), et depuis trad. en italien par R.F. Ange Celestin de Mont-Corvin, et nouvellement mise en François par un secretaire interprete de sa Majesté, Lyon, par Jean Phillihotte, 1599.
- 3) 長崎の26聖人記念館の初代館長結城了悟 (Diego Pacheco López de Morla, 1922-2008) によると, フロイスの「殉教記録」のマカオのポルトガル語版はアジア最高指導者ヴァリニャーノ Valignano 神父から修正を受けてローマに送られたが, マニラのスペイン語版は, 修正なくローマに移送されて, この修正のない殉教報告書が20世紀に発見されたとのこと (結城了悟「解題」(ルイス・フロイス『日本二十六聖人殉教記』結城了悟訳), 聖母の騎士社, 1995年)。
 - 4) 拙稿:「16世紀における寛容の問題—「26名の殉教事件」の欧州への伝播を中心に—」中央大学人文研究所『人文研紀要』第95号, 2020年。
 - 5) 第1章は中央大学社会学研究所の公開講演会 (2022年9月14日, 講演者: 筆者) の内容を基にしている。
 - 6) 「殉教記録」及び『キリスト教辞典』(上智学院新カトリック大事典編纂委員会, 研究社, 1996-2009年) を主に参照。
 - 7) – Nathalie Kouamé, « Une drôle de répression pour une nouvelle interprétation des mesures antichretiennes du général Toyotomi Hideyoshi (1582-1589) » in *État, religion et répression en Asie : Chine, Corée, Japon, Vietnam, XIIIe-XXIe siècles*, Éd. Karthala, 2011, pp. 149-182. 条文の記載は p. 158.
– Clotilde Jacqueland, « Une catastrophe glorieuse : le martyr des premiers chrétiens du Japon, Nagasaki, 1597 », in e-Spania. Revue interdisciplinaire d'études hispaniques médiévales et modernes CLEA, 2011.
– Nathalie Kouamé, *op.cit.*
 - 8) Kouamé, *op.cit.*
 - 9) 結城, 前掲書, 第16章。

- 10) *Les trois enfants martyrs du Japon : modèles et protecteurs de l'enfance chrétienne*, Saint Brieuc, impr. Guyon frères, 1863, pp. 15-16.
- 11) *Ibid.*, pp. 15-17.
- 12) *Idem.*
- 13) 結果的に、これらの用語の使用が正当化された (Frank Lestringant, *Lumières des martyrs, Essai sur le martyr au siècle des Réformes*, Classique Garnier, 2015, ch.1.)。
- 14) 『羅葡日対訳辞書 (Dictionarivm Latino-Lvsitanicvm, ac Iaponicvm)』1595年。
- 15) « Le Martyr » dans *L'art religieux du XVIIe siècle*, A. Colin, 1972, Ch.III.
- 16) スペインの文書館にその請願書が保管されていると言う (カトリック中央協議会による)。
- 17) 拙稿, 前掲書。
- 18) 同上, 3-6頁。
- 19) *Histoire de la glorieuse mort de vingt-six chrestiens qui ont esté crucifiez par le commandement du roy de Jappon, dont y en avoit six Religieux de S.Francois, trois Jesuites et dix sept chrestiens natifs du Royaume de Jappon, envoyee le XV de mars, par le P. Loys Frois à R. P. Claude de Aquaviva general des Jestuistes, traduit d'Italien en François. par J. de Mafillastre Viconte de Falaise*. A Rouen, chez Théodore Reinsart, pres le Palais, à l'Homme Armé. 1600 (タイトル抄訳: 『日本の王の命令によって磔にされた26名のキリスト教徒の栄光ある死の物語, そこにはフランシス会士6名, イエズス会士3名と日本王国生まれのキリスト教徒17名を含む, 3月15日にフロイスからイエズス会総長クロード・アクアヴィーヴァに送られ, マルフィラストル子爵に翻訳される』)。
- 20) *Ibid.*, f° Aij.
- 21) *Les Trois enfants, op.cit.*, p.10.
- 22) カルラ・トロス, 「日本の殉教者の歴史的記憶と宗教的アイデンティティ」『アジア・キリスト教・多元性』, 第17号, 現代キリスト教思想研究会, 2019年, 23-34頁。
- 23) Tanzio da Varallo, *Martyrdom of Franciscans in Nagasaki*, 1627, oil on canvas, Milan, Pinacoteca di Brera.
- 24) 拙稿, 「16世紀末日本におけるキリスト者の処刑について」『白門』69号, 中央大学通信教育部, 2017年2月, 8-14頁。
- 25) Canonisation des 26 martyrs du Japon par Pie IX, le dimanche de la Pentecôte, 8 juin 1862.
- 26) *Ibid.*, ジャン・サラザン (Jean Sarrazin) の記述。

27) *Les Trois enfants, op.cit.*

28) *Ibid.*, p. 4.

29) *Ibid.*, p. 8.